

報告：

中学校で発生した集団有機リン中毒

永美大志*・八百坂 透^{2*}・前島 文夫*
西垣良夫*・夏川周介*

本学会関連の一施設から、某中学校において集団有機リン中毒発生の報告があり、患者を受け入れた地域の4医療施設を対象に調査した。

7月下旬、学校関係者がアリの駆除のため、有機リン系殺虫剤メチダチオン40%製剤の原液を、10時から11時の間に校舎近くのアリの巣に散布した。付近の教室内にガスが流入し、中学生たちが自覚症状を訴えて、昼ごろから16名が4病院に搬送された。

患者の訴えた症状は、「頭痛」13名、「吐気・嘔吐」11名、「めまい」4名などであった。うち1名は2回嘔吐した。コリンエステラーゼ活性値、瞳孔径および対光反射は、いずれも正常範囲内であった。3名が経過観察のため入院したが全員治癒し後遺症は見られず、軽症に止まったものと考えられる。

しかし、劇物である有機リン殺虫剤の原液を、そのまま中学校の教室付近で散布したことは、厳に戒められるべきであり再発防止が図られる必要がある。

①集団中毒 ②有機リン殺虫剤 ③中学校

はじめに

農薬は、農業生産、衛生などの目的で使用される化合物群であり、農作業者の労働負担を軽減し、生産性を高めるなどの利点がある。一方で、本質的に生物毒性を持つものであり、開放的に大量に使用することから、その人体影響、環境影響を常に監視し、防止する必要がある。さらに、自殺目的の服毒は後を絶たず¹⁾、2007年12月には、殺虫剤を混入された冷凍ゴーザによる中毒事件^{2~4)}、2008年5月には土壌燻蒸剤クロルピクリンを服用した自殺者の吐物による救急外来における集団中毒事故^{5,6)}が発生した。

日本農村医学会では、1966年に若月俊一によ

り農薬中毒特別研究班が組織され長年この問題に取り組んで⁷⁾、農薬中毒の症例集報告を行なった⁸⁾。現在は、日本農村医学会・特別研究プロジェクト・農薬中毒部会（統括責任者 夏川周介⁹⁾）として全国の関連医療施設の協力のもと臨床例調査を行なっている。その中で、本学会関連の一施設から、ある中学校において集団有機リン中毒が発生したとの報告があり、患者を受け入れた地域の医療施設の協力を得て調査をおこなったので報告する。

方 法

2008年7月下旬に国内の某中学校で経験された有機リン殺虫剤によると思われる集団中毒事例について、本学会の関連施設を含めた4施設に、調査票を郵送して調査した。

調査票は、性別、年令、曝露年月日時刻、来院年月日時刻、転帰年月日、主訴、曝露の状況、曝露経路、曝露の場所、中毒に至った原

* 〒384-0301 長野県佐久市白田197
佐久総合病院健康管理部

^{2*} 旭川厚生病院

(受付：2012年3月23日)